

著者 1907年新潟県に生る 東京文
理科大学英文科卒 英米留学 文学博士 現
在一東京教育大学教授 著書—英吉利現代批
評文学 現代アメリカ批評文学 マッシュー・
アーンOLD オールダス・ハクスレー 英米
の歴史と文学 アメリカ文学思想 イギリス
説 アメリカ版 ロレンス訳詩集 等

論文とレポート

〈英米文学・テーマの考え方書き方〉



一九六六年六月二十五日 発行
一九七二年十一月三十日 第八刷

定価 五八〇円

著者 成田 成寿

発行者 渡部 喜一

印刷 鎗田 豊治

製版・刈部 哲夫 製本・松岡 清直

発行所 八潮 出版 社

東京都千代田区飯田橋一丁目六ノ四号
電話・東京 (二六二) 七〇一二番
振替・東京 二三八九八番

論文とレポート

論文とレポート

英米文学・テーマの考え方書き方

東京教育大学教授

成田成寿著

八潮出版社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

は し が き

卒業論文やレポートの書き方というようなことは、実は、どうでもよいことのように思われる。内容さえ、よくできていれば、つまり書き方は、どうでもよいようなものである。そうはいうものの、論文には論文のふつうの書き方がある。あまり、とっぴな書き方をしても、読むほうで困ろう。また、内容さえよければよいといっても、全然論文の形式を知らなくて書くというのも不安であろう。ここでは私は、大体自分が卒業論文、その他を書いたときの経験を基礎にして、一人の先輩が、自分の体験を語るというようなふうに書いてみた。もちろん、卒業論文を、ずいぶん長年の間読んでいるから、そのほうの経験から感じたことも、多少は加えてしるしてある。しかし、論文の書き方には大体の常識的な標準みたいなものはあるけれども、どうしても、この本の中に書いてあるとおりの形式でやらなければならないということはないわけである。書き方にも、いろいろな書き方があろうし、また、あってよいと思う。だから、私の書いたのは、卒業論文はこんなふうに書け、というのではなく、私としては書くときに、こんなふうに書いた。困ったのはどういうところで困ったか、こうしたら、わりに、うまくい

った、というような体験をしるしたのである。

英米文学の卒業論文やレポートは、多くの場合、書きにくいのがあたりまえである。われわれにとっては外国文学である英米文学は、言葉も思想も、理解しにくい上に、外国語で書かなければならないことが多いのだから、書くほうの側からは二重ともいえる大変な負担なのである。どの学問でも、楽なものはないのであろうが、外国文学を学問的に研究し論文を書くという苦労は、おそらく、実際に、その道を歩いてみた人でなくては、わからない真剣なものである。私は、そういう苦労を経してきたし、今でも自分でも、なお、苦労をしつづけている者である。若い人たちに教えるとか方針を示すなどということは私は嫌いであるが、私の経験を述べて、同学の若い人々に、すこしでも参考になれば幸いであると思って、いろいろのことを書いてみた。

なお、これは十年以上も前に書いたことを、このたび改めて出版するに当たり、全部にわたって改訂を加え、特に後半は全面的に書きかえた。

昭和41年春

著 者

目 次

はしがき	5
I. 卒業論文の経験	9
II. 卒業論文とはなにか	13
III. テーマと方法	28
1. 自分の性に合うテーマ	28
2. 現代文学と論文	30
3. 扱い方の問題	32
4. 扱い方の実例	34
5. 著作の実例(1)	39
6. 著作の実例(2)	57
7. 書出し	85
8. 輪郭の作成	88
9. 清書	89
10. 英文の練習	92
11. 継続的な書き方	97
12. 実証的論述	99
IV. 論文と問題	101
V. 問題の採りあげ方と参考書	129
VI. 論文の書き方	145
1. 表題 (Title)	146

2. 目次 (Contents)	156
3. 序文 (Preface)	171
4. 章 (Chapter)	171
5. 引用 (Quotation)	174
6. 結論 (Conclusion)	176
7. 書目 (Bibliography)	176
8. その他の論文執筆上の注意	192
9. 論文書き上げ後の諸注意	199
VII. 修士論文・博士論文について	202
VIII. 卒業論文題目の実例	206
IX. 論文と口述試問	218
X. レポート	220
参考文献	222

I. 卒業論文の経験

卒業論文は、大変、辛いものであったと今でも思います。大学の卒業論文は、たいそう偉いものであると聞いていた。そのころの旧制の大学3年間の総締めくくりで、それに自分の全能力、全知識を傾けつくすものだということになっていた。将来の自分の研究の基礎にする手初めだという覚悟であった。これこそ大学に入ったものと、そうでないものとの差であるように思われた。だから、大学へ入るとすぐ卒業論文は何にしようかと思った。なかなかはっきりした考えがきまらないうちに、1年がたっとうしてしまいうのであった。1年の半ばごろには、なんでも偉いことをしなければならぬのだから、一つスペンサーの『神仙女王』すなわち『フェアリー・クウィーン』(Edmund Spenser, 1552?—99: *Faerie Queene*)でもやってみようかと思った。そして『フェアリー・クウィーン』を丹念に読みながらノートをとっていった。しかし1年のときに単位論文として書いたマシュー・アーノルド(Matthew Arnold, 1822—88)の批評論文も、おもしろそうに思えた。2年に進んでから、スペンサーとアーノルドとは、私の心の中でだいぶ争った。スペンサーの華麗さに心を惹かれたが、現実の生活や文学の問題としては、アーノ

ルドの方が一層身近のように感じられた。私はアーノルドの著作の全部や参考書類を絶版になっているものと一緒に、丸善その他の洋書店を通してイギリスから取りよせた。アーノルドの全集といわれるのは、そのときも手に入らなかったが、アーノルドの父の伝記とか、あるいは血縁の人たちの書きものなど一通り手に入った。書簡集も、当時手に入るものは手に入れた(それらの書物を一冊残らず戦災で失ったのは残念である)。そしてまず、アーノルド自身の著作を片っぱしから読んで、ノートに重要だと感じたことは書き抜き、また、感想も記していった。そのノートは10冊くらいになった(それも焼いてしまった)。

それでも2年のときは、単位論文や試験の準備などに追われて、思うように研究が進まなかった。当時の最終学年の3年目になると、こんどは本当に気がもめてきた。そのころの卒業論文の提出期限であった12月の25日までに提出するとして、そこから逆に計算していくと、どうしても9月一杯には草稿ができ、10月、11月と2ヵ月を清書にかけて、12月中を、でき上がった論文を読みなおすことにはかけないと、都合の悪いことになるだろう。3年のはじめには、アーノルドの著作を、まだ全部読みきっていなかったから焦った。夏休みがすんで9月に登校してみると、手廻しのよい同級生の中には、卒業論文の清書も、もうすました人があるような噂もあって慌てた。その秋は、何をしても着着かなかった。なにかというと卒業論文のことが思いうか

んだ。それは亡霊のように、私の心にとりついてはなれなかった。それでも、いよいよ最後の提出期限の3、4日前になって、やっと大判洋けい紙に一行置き片面に書いた200枚余ほどのものができ上った。そのころは、卒業論文は製本屋に出して、りっぱに本のように製本し、金文字などを入れて出すのがふつうであったが、もうその時間がなかった。その上、製本屋に出して万一、紛失でもしては困ると思って、出しきれなかった。大体、はじめに草稿を一通り書いてしまって、それから清書にとりかかったが、草稿の通りに書いていくということは、どうしてもできないものである。いろいろ直さなければならないところができたり、原文や参考書などを見直さなければならないところができたり、一日片面一行置き10枚くらいの清書が難しいのであった。タイプライターで打っても、大体同じくらいの労力であったろう。私は手で書いていったのであったが、ペンを持っている指が痛くなって長くは書き続けられなかった。一日10枚仕上げるのが、やっとであった。ようやく全部の清書をし終ったときは、ぐったりして、しばらく下宿の自分の部屋で寝そべっていた。

審査の結果がまた心配であった。その年は卒業論文口述試験という、卒業論文に関係する口頭試験は課せられなかったが、それにしても、不安であった。書き直しを命じられたものもあったが、私は幸いに無事であった。人の文章を、そのまま失敬

して取って入れたりすると、文体が異なって、すぐわかるということであった。私のは、全部自分で書いた文章で、大変ごつごつしているが、自分で考え、自分で組み立てていったことがわかってよい、ということであった。大学を卒業してすぐ、ある書店から、英米文学者の評伝双書が出ることになった。恩師やいろいろの人々のお蔭で、私はその中に執筆させてもらったが、それは大体、卒業論文を骨子として、そこへ伝記などの部分を付け加えたりしたものであった。

卒業論文を書くことはくしかつたが、それを仕上げたあとでは、どんな問題とでも一応取っ組んでみるだけの自信ができた。ものを考えたり組み立てたりしてみる方法も自分でできるようになった。私は、その後、卒業論文のテーマにしたマシュー・アーノルドからいろいろの問題に進んでいったが、ものを考えるとき、よくアーノルドを尺度にしている。たとえば、あることを考えるときに、アーノルドと比較して、どうのこうのと、気がついてみると考えているのである。また、もう一度アーノルドをゆっくりと読み返してみたいつもりでいる。イギリスへ行く機会があったときも、それまで手にすることのできなかつたアーノルドの、いろいろの文献や筆蹟も注意して見てきた。後にアメリカへ行ったときも、できるかぎりアーノルドに関する資料は注意してきた。

II. 卒業論文とはなにか

私は以上において、私が旧制の3年制の大学のときに経験した卒業論文をめぐる、いろいろのことを記した。ことわっておくが、それは、卒業論文を同人雑誌ふうに騰写印刷にして出した私の学生たちの、ある年の試みのために、寄稿したものをもとにして手を加えたものである。

新制大学に入った学生にとっては、現在私たちの経験した旧制大学の場合と、やや、事情が異なっているように思われる。旧制大学の場合は、一応、旧制の4年ないし5年の中学を了えて、高等学校や専門学校の3年ないし4年の期間を了えた者が入った。その旧制高等学校3年の卒業生が旧制大学としては正統的な進学者で、専門学校から大学へ進むものは、一種の傍系と考えられた。専門学校は、それはそれとして一種の完成教育であると考えられていたのであった。そして外国語の時間が、一般には少なかった。もっとも外国語専攻の場合は別である。その高等学校の3年間においては、外国語がもっとも重要な教科であった。また、大学の入学試験は、学部によって異なり、ある学部では入学選抜を行なわないところもあったけれども、いずれにしろ、外国語を特に重んじた。外国語だけを入学試験

科目にしていたところもあった。大学では、外国語は、すでに高等学校で一応修得し了わっていると考えられ、すぐ原書について演習するというようなところもふつうであった。ちなみに旧制大学の特に法学部、経済学部などの入学志願者が受験勉強にもちいた本としては、

T. Carlyle: *Sartor Resartus*

M. Arnold: *Culture and Anarchy*

J. S. Mill: *On Liberty*

などがあった。これらが、旧制高等学校でも楽に読めたということではない。これらは、19世紀の文章で、いずれもかなり難解なものであるが、大学へ入るためには、一応、このくらいのところまで語学力をつけておくことが望ましいことであったということがいえる。東京大学の経済学部の入学試験には、かならずミルの文章が出題されるというのが伝説のようになっていた。そのようなふうで、大学へ入るとすぐ卒業論文のことを問題にするというようなことも考えられるわけである。現在のいわゆる新制大学の場合、学年は4年であるから、まず、そこで旧制大学の場合と事情が異なってくる。それから、新制大学はふつう2年ずつ前後に分れ、前半の2年は教養学部や教養部とされているところもあり、主として一般教養科目に当てられている。そこでは多少専門科目をやる大学もあるけれども、一般的にはそれほど専門化されていないことはどの大学の場合で

も、ほぼ同じことであろう。そうすると、専門に分れた後の2年間でやや専攻の問題を考えることになる。しかし、専攻に分れたばかりの3年で、卒業論文のことを考える余裕があるかどうか問題であろう。ようやく専攻学科について、おぼろげに分りかけてくる時分といった方が一層適切ではあるまいかと思われる。じっさいは大学の3年目は一般教養から専攻に移るときであり、問題を英文科についていっても読解力の比較的進むときである。思想的にも、ようやく人生の問題を、しっかりと見つめられるような時期になっている。しかし、このときは、おそらくは語学力の修養や知識の吸収に忙しく、自分が卒業論文として、あるいは、これから長い一生取り組む問題として何を選ぶかというようなことは、まだ、ほとんど考えられないことなのではなかろうかと思われる。しかし、想像すると、このあたりで自分が読んだり考えたりすることが、卒業論文なり何なりの問題になる可能性が非常に多いのではないかと思われる。自分の趣味なり知識なりをできるだけ広げることが望ましい。

現実の問題として、3年の後半あたりから、そろそろ卒業論文というようなことを考えだすということになるのではあるまいか。しかも3年は、まだ、単位論文や単位試験で忙しいだろう。じっさいに、卒業論文のために読書しうるのは、4年になる春休みころかもしれない。3年までの間に、できるだけ必要な単位を取っておいて、4年には、できるだけ残る単位を少なくしておき、全力を卒業論文にかける方がよいだろう。事実、